（農）宇多津古代米組合の活動支援

■　（農）宇多津古代米組合　■

（中讃農業改良普及センター　高八弘　柴田裕子　原井則之　○香西宏）

●対象の概要

宇多津町は中讃地域の北部にあり、総農家数は156戸、うち販売農家59戸となっている。また、耕地面積は約92ha、うち水田82haで水稲が主要な作目である。

対象の法人はこれまで「鵜多津古代米生産組合」として活動してきたが、令和2年2月23日に「農事組合法人宇多津古代米組合」として法人化し、後継者を含めた10名の組合員で古代米を生産することとなった。

●課題を取り上げた理由

宇多津町でも水田農業の担い手育成が課題となっているが大規模な担い手はおらず、組織化による共同作業もほとんど行われていなかった。町内では唯一「鵜多津古代米生産組合」が組織活動を行っていたが、経営体として確立するために栽培面積の拡大や機械の導入、作業体制の強化が課題であった。また、取引先からの信用度の向上やオペレーターの確保に向けて、法人化して経営発展することが求められていた。

●普及活動の経過

1　集落営農法人の設立

設立前の令和元年11月から農業経営法人化支援総合事業を活用して、専門家を招いて法人化検討会や経営相談会を開催した。

表―1　法人設立の経過　（令和元年11月～）

	内　容	専門家等
11／29	法人経営相談会	中小企業診断士
12／ 9	古代米販売打合せ	経営ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ
12／24	法人化検討会	
2／ 3	法人登記打合せ	司法書士
2／13	簿記・会計説明会	税理士
2／23	創立総会	

当初は法人化に慎重な意見もあったが、座談会を重ねることで少しずつ合意形成が図られた。

2　古代米の品質改善を目指した栽培指導

＜土づくり肥料の検討＞

これまでの活動として、健康食品会社等と協議して古代米の「朝紫」と「紫黒苑」を栽培していたが、夏季の高温による着色不良と収量の低下が問題点であった。特に「朝紫」は黒の色付きが悪いことが課題であり、強く改善が求められていた。そこで、令和2年に展示ほを設置してユーキ鉄ケイカル（土づくり肥料）の効果を検討した。ケイ酸は水稲の収量や登熟歩合を向上させる効果があり、今回の試験でも黒米の粒張りや色付きが改善されることが明らかになった。

＜現地指導と栽培しおりの作成＞

令和2年度は梅雨明けが遅く曇雨天の日が多かったため、古代米の初期生育は軟弱徒長気味であった。また、紋枯病やコブノメイガ等の被害が懸念されたため、各ほ場を調査して10月までに6回の栽培管理情報を発出した。特に8月下旬頃から「紫黒苑」でトビイロウンカの発生が確認されたため、出穂後の防除を早急に行うよう周知した。

10月20日には取引先の加工メーカーを招いて、今年の古代米の出来を検討するための検見会を開催した。

検見会の様子

令和3年度に向けての栽培しおりの内容について、古代米生産組合や宇多津町と相談して、作業の日程を見直した。また、土づくり肥料の施用が品質の向上に有効なことや防除作業は共同で行うことを踏まえて肥料、農薬を見直した。

３　法人経営の強化支援

法人の会計事務にあたり、組合員はパソコンによる農業簿記の経験がなかったため、普及センターでは簿記ソフトの操作や基本的な知識を指導した。また、収支や帳簿の適正な整理を支援したことから、令和２年10月上旬に円滑に決算が実施された。

通常総会の様子

●普及活動の成果

１　法人化による高品質な古代米の生産

組合はこれまでも播種、育苗作業を共同で行っていたが、田植えや防除及び収穫作業も計画的に行うことで、作業の効率化と平準化を図ることにした。また、作業時間に応じて従事分量配当を支払うため、日々の作業時間を必ず記帳するようになった。

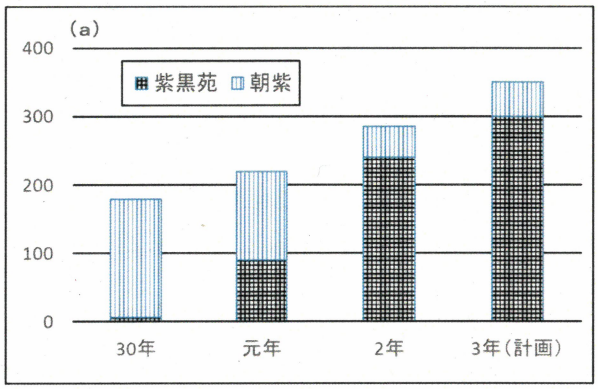
また、土づくり等の重点的な指導により、令和２年は８月の最高気温が高く降水量が少なく推移したものの順調に生育し、田植え時期を遅らせたこともあり高温障害はほとんどなかった。全体の生産量は約 9.9ｔ、平均単収は約 340kg でまずまずの出来であった。

２　役員会の開催と各種研修会への参加

法人として事業を円滑に行うため、定期的に役員会を開催した。これにより作業のスケジュールや役割分担が明確になり、計画的な栽培管理ができたと思われる。また、新たに若い組合員が加入したため、ＪＡや普及センターの各研修会に参加してもらい、将来の法人運営に必要な知識を習得した。

３　契約数量の増加

取引先の加工メーカーから、来年以降の契約数量を現在の４ｔから 10ｔ程度に増やしたいという申し入れがあった。これは法人化により青色申告や軽減税率に対応するなど経営管理を大幅に強化したことが評価されたためと考えられた。



図－１　古代米作付面積の推移

●今後の普及活動の課題

１　後継者の育成

総会において組合長から、「若い人が入ってくれる組合にしたい」とあいさつがあったように、最大の課題は後継者の育成である。作業を円滑に行うとともに組織を活性化するため、若いオペレーターの育成が急がれる。

２　古代米の規模拡大と安定生産

古代米については、今後も計画的に規模拡大して、作付面積は令和２年の 2.9ha から 3.5ha 程度に拡大する計画である。単収は土づくり資材の施用や適期防除により、360kg 以上にすることを目標とし。今後も収量と品質を確保するため、各種情報の提供や現地指導を実施する。

３　経営指導

今回法人化して新しく出発したため、経営面では簿記記帳をきちんと行うとともに、令和３年には収益を確保して事業を軌道に乗せる必要がある。

健康食品や中食等の関心の高まりから古代米の需要が拡大しているため、規模拡大に向けて優良な農地を確保する必要がある。また、将来は麦作を導入する計画であり、機械導入に備えて安定した利益が出せるように支援したい。